随筆・評論

野村宗一
山口育子
山口一　選

特選

たぁくんのお母さん

西今町
松本トシ子

息子は、四歳になる秋、進行性筋ジストロフィー症と診断された。

そう長くは生きられません。思春期ごろまでの命です。年月と共に身体中の筋力が衰えます。鍛えようとして、ジョギングやスポーツをやらせ、疲れさせるのはよくない。むしろ静かに見守り、この子が出来ることを出来るペースでさせてあげて下さい。よい思い出をたくさん作ってあげなさい。という医師のことばが、突き刺さった。見た目にはほかの子と何も変わっていないのに。診断が何かの間違いであってほしいと願った。

京都の病院へリハビリに通った。そこは同じ病気の患者が多く、進行の度合いが時系列に見えてしまう。幼くても肌でわかるのか、帰り道にはひと言もしゃべらなくなる。気分転換をするために、京都の街を歩き、好きな物を食べさせ、デパートの屋上の遊具で遊ばせ、時には清水寺などの名所にも連れて歩いた。

さまざまなリハビリを行ったが、かいつまんでいえば、入浴し、体をじゅうぶんに温めた後で、固くなっていた筋肉をほぐすだけである。夜には、アキレス腱が縮まないように補装具をつける。薬が無いから、進行を遅らせるためにその様な方法をとるしか無いのであった。

「一時間たったら外してや。僕が寝ていてもぜったい外してや」と懇願する。

重くて身動きのしづらい補装具を息子は極めて嫌がった。けれども、毎晩、その約束を破らねばならない。体の力が失われて寝返りさえ出来なくなってきていた。装具で締めつけるとわずかな身動きもままならない。夜中に苦しくて何度も目をさます。主人と私は交替に起き、体の向きをかえてやらねばならなかった。

小学生になったころには、校舎の段差がつらく、水道のビニールパイプにつかまりながらよじのぼっていた。

二年生の時だった。

いつもの時間になっても帰らないので、心配になり、雨の降る道に出た。寄り道なんかする子ではない。かすかに声を聞いたように思ったから小走りになった。

息子が道端にしゃがみこんでいた。

「おかあさん」

雨に濡れたレインコートのまま、息子を抱いて立ち上がらせる。

「交差点を渡っていたら、転んでしまった」

頬に泥がついている。

「すぐに起き上がろうとしたけど、ランドセルがずれて頭に乗っかってきたし、レインコートがからまって、立てんかった」

ランドセルが重すぎたのだ。長靴のサイズが大きかったせいもあるだろう。アキレス腱が固く成ってつま先が上がりにくくなっていたのかも知れない。

朝は元気に玄関をでたのに。顔の泥をぬぐった。涙を流してはいなかった。頬ずりをす

ると冷たい。

「ぼく、『おかあさーん、おかあさーん』て、何回も呼んだんやで。でも『おかあさん』だけでは、誰のおかあさんか、わからへんから、『松本たぁくんのおかあさーん』って呼んでたんや」

「たぁくん、ごめんな。お母さん、聞こえんかったんや」

もし聞こえていたら、きっと心臓が凍りついたにちがいない。涙が止まらなくなった。

「でも、道の真ん中でじっとしてたら、自動車にひかれてしまうから、這ってここまで来たんや」ちょっと照れ臭そうに言う。失敗はしたけれども、すこしは挽回をしたみたいに。

この子は、この子なりに精一杯、けなげにがんばったのだ。ほめてあげようとしたが、言葉が見つからなかったので、レインコートの上から、頭や肩や手や足を撫でてやるしかなかった。細い、かなしくなるくらい細い体を。

翌日、学校に行き、校長先生に事情を聴いてもらった。段差のある場所は板がはられ、スロープがつくられた。そして、登下校に付き添うことが許可された。

朝、小学校まで息子を送り、授業が終わると一緒に家まで歩いて帰るのである。息子の歩みにあわせた、ゆっくりとした歩行だったが、それは今になって振り返ると、私と息子の間に生まれたきわめて濃密な時間であった。

ひとの目には「過保護」と映ったかもしれないが、息子に学習意欲があり、学校に行きたがる以上、私はいくらでも、息子の足や靴のかわりになってみせる。なにしろ私は、

「松本たぁくんのお母さん」なのだから。

「たぁくんのお母さん」は世界にひとり、私しかいないのだから。私は自分を励ましながら、毎日まいにち歩いたのである。

そして、息子が亡くなって随分な時間が経ってしまったけれど、今でもそう思いながら、くじけずに生きている。

（評）進行性筋ジストロフィー症という難病をもった息子と暮らした日々の、筆者の感情が切実に伝わってきて胸を打つ。とくに、小学二年生の雨の下校時に転倒した出来事は、表現力豊かに書かれていて、転んで泥まみれになった子が、必死に母を呼ぶ場面は読者の心に響く。全編に、息子と生きた濃密な時間と母の心情が綴られており、その子が亡くなった今、くじけずに生きようとする締めくくり方もよい。

特選

山仕事の想い出

仏生寺町
小野　隆

山村の生活は自然との付き合いで季節に応じた営みがありました。私が生まれ育ったのは彦根市街から東へ七キロメートルの標高約三〇〇メートルの山中で、縁先に出ると琵琶湖とその対岸が見えたのを思い出します。多くの家が農林業を主として生計をたてていました。昭和三〇年ごろには、国の政策もあって雑木を切りその地に競って杉、桧を植えていました。雑木は薪にして市街地へ燃料として販売し、まだ車も無い時代でリヤカーに積んで運んでいましたが、途中の佐和山隧道への坂道は難所で引っ張るのが大変な重労働で苦労がありました。

育林の作業はなかなか手間が要るもので雑木を切った後は場所を掃除します。細いものは焚き物の柴にするのにナタで切って束ねて背負って道路まで運び出します。自宅の家事で燃やすもの、販売するものに分けておきました。他の余計なものはその地で燃やして処分し綺麗にしていきます。

植林は初冬から春先に行いますので、それまでに必要な本数を斡旋業者へ注文します。当時は町の各戸へ回覧版で注文の用紙が回ってきて責任者がまとめて発注してくれてました。一反（一〇アール）に三〇〇本が目安だったように記憶しています。林道から離れた場所は担いだり背中にしょい込む「セタ」というものにくくって持ち運びました。植林は鍬で穴を大きめに掘ってから根の方向を考えて倒れない様に注意し埋め、土をかけて踏み固めていきました。雪で倒れない様に竹の支柱を立てて藁縄で軽く縛ります。うさぎに噛み切られない為にも効果がありました。植え終わるとやれやれとひと安堵したものです。

冬を越すと次の仕事が待っているのです。「雪起こし」と呼んでいましたが、積雪地帯なので一メートルくらい降ったことがよくありました。植えた木が雪の重力で倒れたり折れたりします。このままではまっすぐに成長しないので放ってはおけません。支柱を新しいものに交換したり立て直して苗木をくくりつけて直しました。三年以上に成長した場合は藁縄を縛って斜面の上方へ引っ張って別に立てた杭にくくりつけます。

一〇年くらい経過するまでは毎年この作業が四月頃の仕事でした。父は私が小学校三年生の時に亡くなってしまい母子家庭でしたから、母親の手伝いを見よう見まねでしたものです。わが町には総山という共同の財産があってこちらも同じように植林をしたので必ず毎年総出の作業がありました。

雪起こしの次は「下刈り」の作業で、木の周りには雑草がおい繁りますから鎌で刈りとります。つる草は巻き付くと木を折ってしまいます。刈った雑草は枯れて肥料になるし、木に射し込む日光が成長を促してくれます。暑い中での作業は厳しくすぐに汗びっしょりになってしまいました。蛇やマムシもいるし秋が近いとハチの巣もあってこれもまた注意を要します。

五年程度すると成長の勢いでまっすぐに伸びた木が空に向かっていて嬉しくなりました。

現在、山を見上げると苦労して育てた木が大きく育っています。ところがこんなはずではなかったと言う思いなんです。というのも今では木材は売れませんし、もし売れても安価でとても今までの投資を回収できるものでは無いのです。外国から輸入され安価な材木が加工されて市場に出回ります。木材を切り出す作業者も高齢化され、厳しい４ｋ仕事には若者が就きません。かつてあちこちに在った製材所も余り無い状態です。

春の杉花粉は社会の邪魔者として健康の大敵になってしまい困ったものです。便利になった時代の流れが社会環境を変えてしまい家計を潤してくれる筈が目論見外れであきらめになってしまい残念です。自宅周辺の山を見上げると植林し成長した杉の森が山頂まで広がって見えますが今後は世話に訪れる人も無くなりやがては風雪に耐えられずに倒れ朽ちていく運命なんでしょう。琵琶湖をとりまく山々も全国の森林も都会の雑踏からは見向きもなされなくなりますが大切な水源として人知れず頑張ってくれることでしょう。

（評）山仕事の体験が詳しく綴られており、読み応えがある。国の政策に従って植林し、「雪おこし」や「下刈り」など、手間のかかる作業を経て育てたにもかかわらず、社会情勢の変化から目論見どおりにならない林業の現実が詳しく分かり、体験に基づく筆者のメッセージが伝わってくる。社会性のあるテーマであり、テキストとしても通用する作品となっている。

特選

「切り干し大根」の極み

犬上郡甲良町
上野初子

長い冬の間、専らの「おかず」は、大根を用いた煮物であった。でも料理下手な私のこととて、できるものと言えば高が知れていて、ある日は「おでん」、そのまたある日は「鰤大根」…という具合に。

それも、夫が畑から引き抜いてくる泥付きのままの大根を、土間に転がしておくのはみっともない、という稚拙な思いからだった。

「大根取ってきたったぞ」そんな夫の言葉に「おおきに」と応えながらも、内心「どうやって食べようか」と、いつもながらに戸惑った。だから大方その場凌ぎに、冷蔵庫にある物と一緒に煮続けてきただけの日々だった。

そして面倒な気持ちが先立って、取り立てて買い物に行くでもなく、不揃いの器に同じような品が食卓に並ぶ。そんな調子で「土間の大根」をなんとか消費してきた私であった。

しかしながら、三月半ばともなれば、大根たちも大きくなり過ぎて、どこの畑でも、白くて太い胴を半分くらい地中から姿を見せるようになる。そうなると、冬に大活躍してくれたそれらも、旬が過ぎれば引き抜いてしまわなければならない。

我が家も例外ではなく、陽が差す温かい日に、夫は畑の大根を全て引き抜いてくれた。聞くところによれば、大抵の家は、太過ぎるものは畑に埋めてしまわれる、とのこと。

でも、「捨てるようなことをするのはもったいないから」と、畑で育った大根の全てを家に持ち帰ってきた、という訳である。だから当然のことながら、ごつ過ぎて私一人では持ち上げることさえできないものもあった。

さて、土間にゴロゴロと置かれている大根をどうすべきか。それらを眺めながら、どのように処分してしまうことが最良かと考えた。もちろん夫の気持ちを最優先しながら。

まずは、いつもの「おでん」かな、そして次は「鰤大根」…。その次は一体何をすればいい？思いあぐねた挙げ句、誰かがこんなことを言っていたことを思い出した。

「大根は干すと甘くなる。」

でも私には全く根拠のない情報。だけど兎に角やってみよう、と思い立ったのだった。

ところが臆病者にしてみれば、例え失敗しても大したことはないとは言え、大量の大根を薄く切って外に干す、ということだけでも少なからずの勇気がいった。

野菜を無造作に外に干している所を近所の人に見られたら、どう説明すればいいだろう。きっと、気が細かくてケチな嫁だと思われるに違いない…。そんな世間体もあったけど、そこの所は割り切って、一念発起「切り干し大根」を作ることにした。

ところで三月と言えば、三寒四温の安定しない気候。なので、できるだけ温かくて晴れた日を見計らって、大根干しに取り組んだ。

干すと水分が抜ける、ということは理屈では分かっているものの不安ではあった。しかしながら、初めての体験であるから、日が経つごとに干涸びて形を変えてゆく大根が、私の目には、なんと新鮮に映ったことか。

そうやって、十日ほどが過ぎた頃、シワシワに変化した大根を手に取って嗅いでみた。

「店に売ってる切り干し大根の匂いや。」

思わず呟きながら、好奇心から、その中の一欠片をつまみ食いしてみた。

「甘い！」

砂糖を混ぜた訳でもないのに、不思議なくらいの甘さが口の中に広がった。これが「大根の甘み」だったんだ。

生まれて初めて作った「切り干し大根」。そんなものは店で買うものだ、と決めつけていた私の「常識」が覆った瞬間だった。

ところで、あの大きい大根の瑞々しさはど

こへ行ってしまったのだろう、そう思える程、「干した大根」は萎びて小さくなっている。

なんだか、これって今の私みたい…、そんな面白いことに気が付いた。それもその筈、とっくに還暦を過ぎて四人も孫がいる自分。心身ともに萎びてちっちゃくなってしまっていることは事実である。丁度「切り干し大根」のように。

『年々や婆が手痩せて干大根』

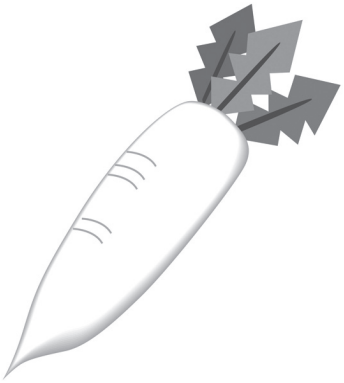
という正岡子規の句は、様々に解釈できるように思うが、私自身の皺だらけでゴワゴワした手と重なるようにも感じる。

この節くれ立った手が、長い年月をなんとか生き延びさせてもらってきた証拠。その手で、まるで自分の分身のような「切り干し大根」を作ったのだった。

これは実に貴重な体験となった。そして、小さな発見でもあった。大根は干すことによってグッと甘みを増す。そして嵩が減るので貯蔵しておくのに便利。

「これは甘いから噛んでみ。」と夫に差し出した所、ちょっとだけ私より賢い彼は、あたかも当然というような顔をした。でも私にしてみれば大きな感動だ。生まれて初めて「大根自体が持つ甘み」を実感したのだから。

（評）夫が栽培した大根を、「切り干し」にすることに、60歳にして初挑戦した筆者が、自然の甘味を発見し感動したという体験を、夫婦のさりげない日常生活の様子とともに、優れた構成力の文章で書いている。しなびた切り干し大根に、正岡子規の句を引用して自らを照らす結びにも余韻があり、小さな一つのテーマを掘り下げて書く文章のお手本にもなっている。



入選

母のお迎え傘

後三条町
寺村和子

小学校四年生の私。もう、六十年以上も昔の話になる。

ある日、学校が終わり、ふと外を見ると雨が降っていた。外へ出ると皆のお母さんや、家の人が傘を持って迎えに来ている。「和子！」と呼ぶ声がした。「まさか？」と自分の耳を疑った。「和子、傘を持って来たった で！」と母の声。そこに母がいるではないか。目を見張り、ひょっとして間違いではないかと思ったが、少し高いトーンの声がして、傘をあげ、母が手を振っていた。

私は彦根市小野町に生まれた。原町、小野町、鳥居本町と中山道沿いにそれぞれの村があり、小野町は丁度まん中にある。家は貧しい三ちゃん農業。父が国鉄の貨物に乗っていたので泊まりも多く、母が田畑を耕し、子どもは学校から帰ると母の手伝いをした。畑へ行き、草取りをしたり、田の苗作りや田植え、稲刈りなどをした。休みになると、朝から弁当持ちで山へ行き、せったを背負わされ、頂上から下のリヤカーまで何度も足を運んだ。昼になると琵琶湖が一望できる、一番高い所で母のおにぎり弁当を食べていた。少々の雨などは大きな木の葉が傘の代わりをしてくれた。子供達に遊んでいる暇はなかった。

当時、保育園というものがなく、妹はなんとか出来たばかりの保育園に通う事が出来、送り迎えは私の役目だった。雨の日はちゃんと傘を持って迎えに行った。

「和子は長女で、四人のお姉ちゃんだからね。」といつも言われて育った。農作業は全て手作業で、私は小さい頃から母の側でいろいろと手伝っていたように思う。今は機械がすべてをやってくれ、三ちゃん農業で、三反程あった田も現在では農協に委託し、米を買っている。すべてが遠い昔の話だ。

母が傘を持って来てくれるなど、考えた事もなかった。いつも友だちに入れて貰ったり手元にある物で頭を覆い、ずぶ濡れになりながら走って帰っていたものだ。

小学校は鳥居本にあり、私達は集団登校で小野川を渡り、鳥居本に入り、中山道をひたすら歩き、子供の足で四十分程かかる学校へ通った。隣の原町の子供は親が協力して送迎をしていたように思う。鳥居本は広く、武奈、男鬼（おおり）の山奥からも通学していた。冬は学校の寄宿舎で生活しており、それが又、私にとって羨ましいことでもあった。

母は忙しく、授業参観もあまり来なかった。四年生の時先生が、「和子ちゃんの作文を発表するからね。」と言ってくれた。母に伝えたら、「ほうか、良かったね。必ず行くからね。」と言ってくれた。私の作文発表だけ聞いてすぐに帰ったのを覚えている。やっぱり母の授業参観は嬉しかった。これも私にとっては数少ない母のやさしい思い出だ。

現在、一緒に住んでいる孫の行事で、年末に餅つき大会があり、招待状が来る。去年も今年も、胸をワクワク弾ませて行った。餅つきが終わり、各教室でついた餅を食べるのだが、「バーバ、バーバ。」と甘えて来る。帰る時は、同じテーブルの子供達全員が孫の真似をし、可愛い手で「タッチ」をしてくれた。

我家は自営業なので、雨や雪が突然降ってきても、両親が傘を持って行くので私の出番はほとんどない。

時代が変わるとすべてが変わる。傘一本の話だが、昔はボタン一つで開く傘なんてなかったし、折りたたみ傘なんて信じられなかった。今は晴雨兼用の傘まである。

「傘のない人、使って下さい。」高校生になって私は「雨傘委員会」に選ばれた。急な雨降りのために学校の配慮でつくられた委員会

で、何と私は三年間、クラス替えがあってもずっと雨傘委員をしていた。クラスの選挙で様々な委員を選ぶのだが、「雨傘委員」の時は、「林和子」といつも名前が多くトップだった。一年生の時の対応が良かったのだろうか。母が私に出来なかった事を、母の代わりになって、皆に傘を借りて貰いたいという気持ちが出ていたのかもしれない。傘の貸し出し、整理など決して楽な仕事ではなかったのだが、「有難うございます。」と言われると、「どうぞ遠慮なく。」とニコッとして学年と名前を聞き、記帳して貸し出すのだ。これもなつかしい思い出の一つだ。この年になり、雨の日になると、遠い昔を想い出し、甘ずっぱい想い出に浸っている。

新しい元号になり、様々な事柄が変わっていくだろう。それでも雨は降る。親が子を想い、子が親を慕う気持ちはいつの時代も同じだ。

「和子、傘を持って来たったで。」

忘れられない母の想い出の一つだ。

（評）農作業に勤しむ母を手伝う四人兄弟の長女である筆者が、小学四年の時、日頃忙しくしている母が、思いがけず学校まで傘を持ってきてくれ、また作文発表の授業参観にきてくれたという貴重な想い出を、確かな文章力で綴っている。高校生の時には「雨傘委員」をしていたということで、雨傘というものを通じて、親子の情や人とのつながりを表現している。

入選

自然造林

日夏町
寺村　しげる

痛い。この痛さは普通ではないぞ。朝から下腹部を押さえて我慢していたが、だんだん痛くなる。昼過ぎにこれは医者に行かなくてはと妻の車に乗せてもらってかかりつけのN医院へ行った。だが木曜の午後とて市内一斉の休診日なのだ。仕方がない「市立病院へ回ってくれ。」腹を押さえながら妻に頼む。

既に診療時間の過ぎた病院の救急外来にたどり着く。痛みをこらえながら救急医に診てもらう。腹部を触診しながら担当医は「これは腸閉塞です。即入院、即手術です。時間を争います。」何ということだ。予期もしない医者のことばに驚くとともに、これはもう任せるべきだとすぐ覚悟は決まった。そしてふと先日亡くなった先輩のことばが頭に甦った。

「東京にオリンピックが来るぜ。元気で二度目の東京大会を見なければ……」彼の口癖だった。その日までと自分を励まして生きて来たのであろう。だがあと五百日が生きられな

かった。そしてもう一人、菩提寺の和尚さんの死だ。私が以前患った心筋梗塞の症状だったので「カテーテルを入れてもらえばすぐ治りますよ」と先輩面をして励ましていた矢先だった。死は待ったなしだ。いつ終わりがやって来てもおかしくない。ふとそんな思いが脳裡を走っていた。

年末にあわただしく退院できて、弱った足のリハビリに、日中暖くなってから散歩するのが日課になっていた。

歩いていくと自治会館の前で子ども会の役員さんが集っておられる。「だい分暖かくなりましたね。また老人会と子ども会の合同行事を持ちませんか。」と話しかける。「地蔵盆の日に町内を案内してもらって、大橋利左衛門さんのお話を子ども達と一緒に聞いたのが印象に残っています。」「子どもたちは大人が教えなければ何も知りませんし、私達母親も嫁いで来たので、知らない事が多いですからね。」

村人達が貧しく、山の木を伐って禿山にしてしまったのを、私財を投げうって植林した利左衛門の行動は感動的であり、「子ども達に町民が伝えなければならないと思います。」という。「利左衛門さんのお宅は実はこの辺だったんですよ。」と言うと、「えっほんとうですか。」と改めてお母さん方は会館を眺めた。

彼岸に入って暖かくなったある日、御無沙汰している墓へ参らなくてはと山中の菩提寺千手寺へと向かった。林道にさしかかると一昨年無謀に伐採されて著しく景観を損なった斜面が目に入る。和尚さんの顔が浮かんだ。「わしが一本石段近くの松を伐ったら防災上困るとあんなに怒った役所はこの暴挙を許すというのか。沢山の緑を失った対策はどうするのかと議会で迫られた役所の答弁は「自然造林にゆだねる所存であります。」とのことだった。和尚さんは嘆いた。「自然造林？何もしないということではないか。無為無策！」失われた遊歩道の緑のトンネルはすぐには戻らない。和尚さんと二人で嘆いたものだった。

私は車を止めて、半年程前に我が家所有の土地に植林した松と銀杏の様子を見ようと斜面を降りて行った。記録的な暑さのため昨夏体調をこわして覗けなかった間に、漆の木と茨が繁茂して私の丈を越えるような姿に成長している。あの植えた松はどうなっているのだろう。服装も靴も山仕事の用意でないまゝゆっくりと降りて行く。植えた松の苗木は漆と茨に埋もれて探すのも大変である。

「これが自然造林か……よくぞ言ってくれた。」先程足を滑らせて鉤裂きの出来たズボンを気にしながら斜面をまた降りて行く。やっと二本の松の苗の少し成長している姿を見つけて近づいていった。育つものはささやかで、はびこるものはしたたかである。ふとその時、利左衛門さんのことを思い浮かべていた。

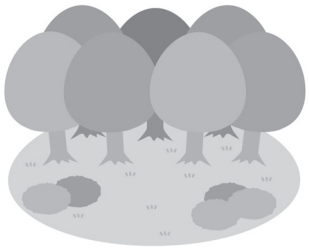
茨の蔓が松苗にからみついている。「これを何とか取り払わなければ」と指を近づけたその時であった。足もとの砂が崩れ身体がバランスを失った。思わず素手で掴んだ指に棘が挿さり、ひとさし指から血が流れる。激しい痛みが手に走った。思わず私は人さし指を口にくわえて血を止めるべく吸った。私は指をくわえたまま言葉にならない声でつぶやいた。

「これが自然造林にゆだねるということか。」苦笑しながら血の混じった唾を斜面へ吐き捨てた。痛みは去らない。

折しも雲間を出た太陽が麓の太陽光発電のパネルの反射を返してきて急に眩しくなった。しばらく動けない。不安定な斜面に立ち尽したまま「我老いたりな」の感でいっぱいになった。

強い照り返しに眼をまばたくと目頭が熱くなり、一筋の流れるものを感じた。

（評）腸閉塞で手術し退院した筆者が、リハビリでの散歩中に、かつて私財を投じ植林した地元の大橋利左衛門の話しが出たことから文章が展開する。伐採された山への対策に、何もしないことを「自然造林」という言葉でお茶を濁す役所の姿勢を、自らが山の斜面で滑って指に出血しながら嘆く場面で、世の中に、縁をとり戻すことの大切さを問いかけている。



入選

私の学生時代

宮田町
武田淑子

昭和十八年四月、夢一ぱいふくらませて高等女学校に入学しました。家から歩いて駅迄三十分の電車通学がとてもうれしかったです。

けれどその頃、日に日に戦争は、激しくなってきていました。何もかも新鮮だった学生生活も一年とたたないうちに学徒動員という波が、私達の学校にも押し寄せてきました。

彦根の湖岸に、元は近江絹糸という紡績工場がありましたが、いつの間にか近江航空となっていて航空機を造っている工場に変身、あの有名なゼロ戦を造っている工場になっていたのです。そこへ私達一年生全員が半ば強制的に動員させられたのです。他所の学校の学生さんもたくさんきておられました。しかも全員寮生活です。一日を三交替にわけて働くことになったのです。食事などそれはそれは大変で今考えると人間の食べるものではないようなものでした。

当時の航空機は大方がジュラルミンという材質でできていて、そのジュラルミンの骨格に形成したジュラルミンの板を張りつけるのです。三菱重工の技術員さんの指導でいよいよ練習です。何もかも見るも聞くも初めての事ばかりで、エアードリルで穴をあけ、エアーハンマーで鋲をかしめ、電動グラインダーで先の丸くなったドリルを砥いたり等々、その鋲をかしめる時の音たるや耳をつんざく様なすごい音でした。

私の班は尾翼の組み立てで、骨組に形成されたジュラルミンの板を当てて、ドリルで穴をあけ鋲を入れてエアーハンマーでかしめるのです。そして尾翼が出来上ったら、そこにスプレーで白く塗装し、最後に日の丸を赤く浮かびあがらせるのです。その時には、お国の役にたっている充足感がありました。

今思い返すと、これが十五才の乙女のやってきたことかと又よく出来たものと感慨深い思いで一ぱいです。

その間にも彦根にも度々空襲警報がでまして、その都度松原湖岸へ避難したり、彦根城の黒門を通って城内に避難したり、遂には城内に作業台を持ちこんで作業していた組もありました。戦争は日毎にきびしさを増すばかり、その中でも製作中のゼロ戦が、やっと出来上がり、夜の間にひそかに湖岸から大津の飛行場まで船で運ばれていったらしいです。

その二三日後、工場の上空を旋回して見せてくれました。それがお別れだったのですね。

今から二十余年前、どこか忘れましたが、（滋賀県内）視察に参加した際そのゼロ戦が展示してあったのですが、思いがけない出会いに涙がでてきました。

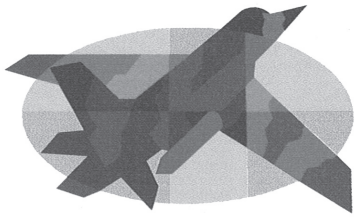
戦局はいよいよきびしく彦根にもB29が度々やってきました。ある日一際けたたましく空襲警報が鳴ると同時にB29がごうごうと音をたててきたかと思うと工場めがけて、バラバラと焼夷弾が落ちて来て大混乱、その時工場も焼けました。寮長さんと外にも犠牲になられた方があったようです。

八月十五日、天皇陛下の玉音放送があるということで避難先から工場に戻り、ラジオの前へ集ったのですが、雑音が入りよくわかりませんでしたが、終戦となったのです。

戦後は私達もなつかしい学校に戻り、短い残りの学生生活をたのしみました。そして平和のありがたさを存分に味わいました。

こうして寝食共にした級友のみなさんたち余りにも激しい移り変りの学生時代は、人生の一頁として深く刻みこまれて、なつかしく思いおこし乍ら残りの人生を大切に送らせていただいております。

（評）大戦末期に、女学生の学徒動員の一人として、近江絹糸の工場で軍用機の組立作業に携わった様子が克明に書かれているが、貴重な記録であり興味深く読むことができる。米軍のB29機による焼夷弾爆撃のことも書かれており、このような戦争体験を記録し、語り継ぐことが、戦中世代の使命であると思う。



入選

私の卆寿

後三条町
三宅春代

弥生三月は、毎年、年度末でもあり、学年末。おこがましいが私の誕生月でもある。一年のうち師走についで、行事が多く出費も多い月だ。

それに加えて、今年は平成から次の時代へ移る歴史に残る年とあって、早くからテレビやマスコミ等で宣伝され、いやがうえにも意識せざるを得ない年度である。

この記念すべき年に、私にとって考えてもみなかった「卆寿」という人生の節目の年。記念すべき日を迎えるのだ。

以前は、「九」と「十」を重ねて「卆寿」というくらいの知識しかなかったのだが、年を重ねるにしたがって、又、自分が米寿を過ぎ、その年に近くになってくると漠然としたものから、現実味を覚え、意識するようになった。

一昨年、八十八才の米寿の祝いを、教え子達がひらいてくれたのが、きっかけだった。

今から六十年以上も前にさかのぼる。当時、壷井栄原作「二十四の瞳」が映画化され、高峰秀子が分教場の先生に扮し、十二名の子ども達と、瀬戸内海の小豆島の分教場をバックに、子ども達との交流を描いた作品である。

この映画に身震いするほど感動。私は迷う事なく大石先生のような先生になろう、と強く決意。念願叶って、鈴鹿山系から琵琶湖に注ぐ清流に沿った西小椋村の小学校、西分教場に、子ども達との学校生活を共にする事ができた時の喜びは、今でも忘れられない。

農村地帯で、当時の農業は、すべて手作業。農繁期になると、どうしても働き手の若いお母さんは、子どもにかまっていられない。母親代わりよろしく、子ども達を一列に並ばせて、爪を切って、顔や手を拭き、ワセリンをすりこんでやったり、出勤途中、しじみを求め昼食に添えたり、学習の思い出より、暮らしを共にしたことが、思い出として残っている。

その教え子達が、一昨年、私の米寿を祝って同窓会を盛大にひらいてくれた。私は一人(ひとり)一人に色紙に、子ども達の幼かった面影、学校生活の思い出、ひとこまを書いて、授与式よろしく手渡したものだ。その折、今度、再び集まるのは、私の「卆寿」と約束して別れ、それが、今年となり、日時や、場所の連絡を受け取った。

遠く、東は東京から朝一番の新幹線で、西は大阪から剽軽な二人の男性が駆けつけてくる、都合のわるい数名以外、集ってくれるそうだ。教師冥利につきるとは、このような事を言うのだろうか。

そんな想いに浸っていると、昨年、「自分達が還暦を迎えるから」と、違う小学校の教え子が同窓会を開催、招待してくれた。矢張り、半世紀以上も前の子ども達。低学年の幼い子ども達との交流であったが、よく覚えていてくれて感激であった。十一月の連休のなか、お天気に恵まれ、彦根城の紅葉はそれによく映えて、これ又、素晴らしいふれあいであった。

今年になって、その教え子から連絡が入り、去年の同窓会には、充分に先生としゃべれなかったので、改めて「先生を囲んで」の名目でもう一度、女性のみ集まりたい旨、連絡をうけた。日時や、私の事情など聞いて、同じ三月の佳き日を知らせてきた。

現職時代、私は子ども達にそんな立派な教育をしてきただろうか。家庭との掛け持ちで分教場時代のように一人身(ひとりみ)で全力投球で、子ども達に接してこれなかったのは、今、もって言える反省であり、思い出でもある。今更、悔いても遅い、どうにもならぬ、と判断、「お言葉に甘えて仲間に入れてネ」と返事はしたが、本心は嬉しかったのが本音だ。

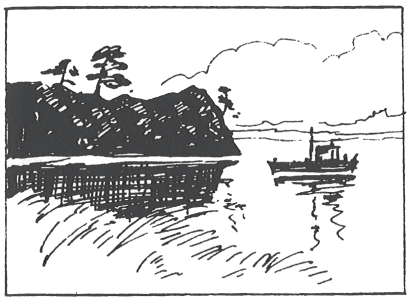
老いて、他人様の御好意、まして、あたたかいふれあいに接する時は、何よりの楽しいひとときだ。

最近、日本人の寿命が伸び、滋賀県は男性は日本一、女子はそれには及ばないが、平均寿命をはるかに超え、医療機関にはお世話にならず、健康に恵まれて日々を過ごせるのをただ、ただ有難く感謝の他ない。ただ右足の膝関節が、変形性膝関節症として不自由だが老化現象の一つとして受けとめ、毎朝起床の折、「今日も一日、よろしく頼むね」と膝をもんで一日の始まりとしている。

かつて、新聞の投書欄で、身よりのない恩師を、かねてから慕っていた教え子達が、最期のお世話とばかりに「教え子葬」として見送った記事に感動したことがあった。

それに勝るとも劣らぬ教え子達の厚情に、やがて迎える「卆寿」のつどいを通して、残り少ない私のこれからの人生を感謝して、前向きに生きていきたいと願っている。

（評）60年以上前に映画「二十四の瞳」に感動して教師となり、最初の頃は勉強を教えたというよりも生活をともにしたという思いが強いという筆者。今なお続く教え子たちとの交流は、教師冥利に尽きるという感慨が素直に書かれている。卒寿にしてなお健筆であることは立派で、前向きに生きようとする筆者の、さらなるご長寿を祈る気持ちになる。



入選

待ちわびた電話

大藪町
外村輝夫

二〇〇三年の秋、当時大垣に住む長女夫婦が、二歳の初孫を連れて里帰りした。長男の結婚式を翌年四月に控えて、当日着る衣装の相談である。久し振りなので妻と話し込んでいたが、さっきから娘の態度が落ち着かない。

「実は……赤ちゃんが授かったんよ。お腹が大きいと、結婚式当日の着物はきついと思うので、服にしょうかなと思ってね」

「えぇっ。それはおめでとう。で予定日は」

「うん。予定日は、来年七月……」

妊娠の報告にしては、表情がさえない。

「まだ妊娠がはっきりしないころ、風邪をひいて薬を飲んでね。内科の処方箋を持って、もう一度産院に、詳しく聞きに行ったんよ」

かたずをのんで娘の言葉を待った。先生は、「その薬が絶対危険だとか、安全だとは言い切れません。安定期であれば胎児に影響はない、とも言えるかなぁ。恐らく大丈夫だとは思うけどねぇ。もし影響があるなら、早い段階で流産するでしょうし、育っているということは、そう気にすることはないんかなぁ。恐らく大丈夫だとは思うけど……」

いまひとつ先生の歯切れが悪い。

「最後に決めるのは親ですが……」

娘は産院のモニターで、既に小さな命が芽生え、心臓がぴくぴくと動くのを見て、うれしくて感動を抑えきれなかったという。妊娠六週、予定日は翌年七月三日と聞かされた。

娘の声は、はずんでいるが、私には先生の『恐らく大丈夫だとは思うけど……』という言葉が、気になってしかたない。一度も『産むのか？』という言葉を口にはしていないが、リスクが大きすぎる。生命にかかわることを、選択するほど厳しいことはない。人の生き死には、さだめを受け入れるしかないのだろうか、などと、葛藤に心が揺れ動いた。

その後、電話で幾度か話をした。私の気がかりや迷いを娘なりに察して、頭では理解しようとするが気持ちが追いつかない。私への不信感を募らせるにつれて、電話口の向こうで、嗚咽をもらすことが多くなった。

娘夫婦は『薬は服用しても健康で元気な子が授かるかもしれない。断念することで今後、体調に影響がでないとも限らない。親子は互いに選べないのに、自分たちのところにきてくれた。授かった生命に感謝したい気持ちは変わらない。この先何があろうと受け入

れ、自分らの意志で育てていきたい。二人で十分話し合った結果で揺るぎない』、と言い切った。

日に日に成長する胎児への影響をずうっと心配し続けることは、かえって精神的にも悪い影響を及ぼす。お腹が大きくなるにつれて、この子は大丈夫だろうか、などと、苦悩は果てしなくつづくことになる。そうそう先送りするわけにもいかない。途方に暮れた。

ここは専門家に相談して、一つ一つ不安を取り除くしかないと心にきめた。娘が服用した風邪薬の処方箋写しを手に、彦根、長浜の市立病院など、主だった医療機関や滋賀県保健所などを訪れた。私の悩みをよく理解して、どの機関も親切に対応してくれたが、納得できる回答を得るまでには至らなかった。内心の苛立ちを隠しきれないでいたとき、昔妻が、お世話になったH先生が、現在開業されていることを耳にした。H先生を訪ねてみては、と娘に告げると、翌日大垣から駆けつけた。

受診から戻った娘は、肩を落として表情に精彩を欠き、かける言葉が見あたらない。

先生は検診後、処方箋と、ぶ厚い医学書を見比べ、これでは詳細はつかみきれない。詳しく調べたいから時間がほしい。と親身になって、苦しみを理解されたとのことだった。

ただ危険度が高ければ、どうするかの覚悟を夫婦で考えておくべき。と諭されたという。産む覚悟はできているものの、先生のことばで娘の心が揺らぐ。我が家で先生からの連絡を待つことになった。眠れない夜が明けた。

翌日の昼過ぎ先生からの電話。

「薬をいろいろ調べてみましたが、全てがOKでしたよ。詳しくは会って話しましょう」

「ええっ、そうなんですかぁ……。うわぁ……うれしい。先生ありがとうございました」

電話口のそばで、私も妻も涙をぬぐうことも忘れて、はしゃぐ娘と手を取りあった。

こうして翌年七月四日、二人目の孫として、女の子が産まれた。当日、大垣の産院での初対面。単に感動ということばでは、言い表せない感慨に心が奪われた。『こうして、会えるなんて……。生まれてきてくれて、ほんとうにありがとうね』、心の中で手をあわせた。時折みせる笑顔が、こよなく、いとおしい。

首がすわると、孫とともにH先生宅を訪れた。先生と奥様が『良かったね』と、我が事のように喜んで孫を抱かれ、写真も撮ってくださった。帰り道『先生のご恩を忘れず、この子が産まれてきて良かったと思えるよう育てていこうね』。娘はゆっくりとうなずいた。

あれから十五年、孫は中学三年生になった。自ら選んだ陸上部の短距離競走で、自己ベストを目指して、日々練習に励んでいる。

（評）妊娠初期に服用した風邪薬のため、生まれてくる赤ちゃんへの影響に不安を持ち苦しむ娘と、その苦しみを共にする父の筆者の葛藤がリアルに綴られていて引きつけられる。そして、信頼する医師から大丈夫と言われた場面では読む者もほっとする。今は中学三年生になった孫娘の成長をみつめる祖父の気持ちに共感できる。

佳作

爺ちゃんてんとう虫

芹橋一丁目
楠亀　美恵子

佳作

救われた私の命

平田町
愛藤　眞佐雄

佳作

小松のおばあちゃん

日夏町
田中　恵子

佳作

ずる賢い鳥

大藪町
脇坂　修身

佳作

木導（もくどう）のこと

野瀬町
中山　敬一

佳作

息子からの電話

後三条町
江畑　民子

佳作

八十の手習い

本町一丁目
中島　暉枝

《総評》

今回は、近年にない二十六編という多くの力作が寄せられたことは、喜ばしい。ほとんどの方が高齢者であるが、文章を書き、こうしたところへ応募するということは、精神面の活性化につながり、若さを保つのに役立つと思う。

応募作品の内訳をみると、幼少のころを含めた「思い出話」が最も多くて十四編、昨今の身の回りのことなどを書かれたものが八編、評論が三編、その他が一編となっている。

戦時中や戦後に幼少期を過ごされた方が多く、貴重な人生経験を積まれているので、やはり「思い出話」が多数を占めることになるのだと思われるが、自分にとって大切な思い出も、文章にして多くの人に読んでもらおうとすると、やはり工夫が必要である。

限られた字数の中で、読む人に感動を与えたり、共感を覚えさせる文章とするには、具体的な情景描写や心の動きを書くことが大切である。また、事前に筋立てをはっきり考え、資料などを調べておく必要もある。

ただ、あまり考えすぎても書けないので、まずは書いてみること。そして、あとは第三者的な観点から読み直したり、十分推敲をして仕上げることである。

新しい令和の時代を迎え、気持ちも新たに、次なるテーマの作品に挑戦していただきたい。